

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	梅屋, 潔(Umeya, Kiyoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.149- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

## 著者リプライ

梅屋 潔

---

まず、本書を書評の対象として取り上げ、また、橋本栄莉さんという適切な評者をあてていただいた『三田社会学』編集委員会に感謝申し上げたい。また、相当の時間を費やして本書を読み解いてくれたにちがいない橋本さんに感謝したい。適切な書評者を得たいま、ここに改めて本書の内容について著者から付け加えることはほとんどないように思える。何よりも、怪しげな「蜘蛛の巣」の比喻を丁寧に汲み取って、それがある程度構造化された形で読まれたこと、本書が射程に入れている比較民族誌の試みについても理解をいただけたことに、喜びを感じている。

ほとんど「ほめ殺し」のような書評に「リプライ」は難しい。書評子から私に求められているのは、もっと、他地域にも目を配って少しは一般化したほうがよい、とか、共同研究をしたほうがよい、ということぐらいだろうか。もっともとも思うが、いずれも即座には応えることのできない、難しいことである。

ここでは、せっかく機会をいただいたので、本書では書かなかったことについて、ちょっと書いてみよう。そのことは、本書では評者の期待にそえなかった理由にもなるように思われる。

### 1. 読者は誰なのか

本書を手にとった人のなかには、「この本の読者は誰を想定しているのか」と尋ねる方が少なからずいる。この機会に一言したい。まず、奇妙に見えるかもしれない、あるいはきれいごと聞こえるかもしれないが、第一の読者は、現地のアドラ人たちである。当然のことながら、想定する読者は、人類学（や社会学）という学術共同体でもあるが、この高度に地域性が反映した資料の真価を第一に正当に評価してくれるのは、当のアドラ人たちをおいてほかにいない。私はどんな学術成果も、エージェンシーが作用する当事者に全く理解不可能なものには限定的な意味しかないと考えている。いくら偉そうなことをいっても駄目である。とくに民族誌的なものにはこの原則がよく当てはまる。その意味で、フィールドで出会った情報提供者（共著者というほうが適切だろう）からの批判に耐える、何よりも「現地に通用する資料」を目指したつもりである。

また一方で、経験に根差した民族誌の課題は、客観性である。完全な客観性などは、目指してもかなわないものであるが、ある程度の客観性を担保するために、ちょうどブルーノ・ラトゥールが土壌のサンプリングについて描写したように、どこからでもさかのぼって原資料にた

どり着けることを目指した。現地の調査助手の力を借りて現地語版、英訳版を完成し、続いて日本語版テキストを作製した。こうした作業には、時間も手間もかかる。その間にさまざまな技術の進歩が我々の作業を追い抜いて行った。最初に録音した音源は、カセットテープで、直近のものは、HD ビデオの音声資料である (MD 時代は短かった)。やがてはすべてデジタル化して資料化したいと思っている。当たり前だが、だから客観的だ、などというつもりはない。完全な主観から、ある程度距離を置くことができるだけのことである。ふたりの調査助手ポール・オウォラとマイケル・オロカとは、共著で論文を発表している。マイケル・オロカを 2017 年 9 月に日本に招聘し、共同で研究発表も行ったこともある (Umeya and Oloka-Obbo 2017)。彼らには、調査助手や、情報提供者という表現はそぐわないかもしれない。まさにコラボレーターであり、共同研究者である。

細かい抽象的議論をここでする紙数はないが、以上の二つは、主体間の対話可能性をひらくことにもなると考えている。いわゆる「オリエンタリズム」や「文化を語る権利」論争を経て、なおも民族誌家になろうとした私が、私なりに至った方法論的な解答のひとつである。

すなわち、本書ではまだ私は、パドラという特定の社会と対話しているだけであり、若干の比較民族誌の試みはパドラの側から行っているものの、鳥瞰的に複数 (民族) 集団を並べて視野に入れるレベルには達していない。その意味では、評者の指摘する欠陥については、私もかなり自覚的である。まず、現地での批評に耐える、良質な資料を残したい、というほうにプライオリティがあった。

本書では許可が得られる限り、実名で書いた。説明するプロセス、許可を得るプロセスも、重要だと考えている (それもまた論究の対象になりうる)。近年社会科学には、情報提供者をすべて匿名にすれば事足りりとしている風潮が一部にあるようだ (梅屋 2012)。それは、研究者の調査資料の第三者からの再検討を不可能にし、資料整理の段階でのデータ改竄の可能性を高める。都合の悪いデータは戦略として出さないのが当然だ、と嘯いて胸を張る高名な社会学者がいる現状を嘆かわしく思う。厚生労働省の統計の改竄なども構造的問題なのだ。

## 2. 「災因論」提唱者の意見

もうひとつ、一般の関心が高いのでコメントしておきたい。1980 年代に「災因論」という用語を造語し、この分析枠組みを提唱した長島信弘 (一橋大学名誉教授、中部大学名誉教授) が本書をどのようにとらえているか、というものである。野次馬的な部分もあるだろうが、学説史的な意味もあるかもしれないので、一応書いておく。ある講演会で、本書について、「(梅屋は) 厚い本を書いたがある社会について書ききることなんてできるわけがない」と言及した (長島 2018) 以外は、全体としては沈黙を貫いている。文章については、「だったら文は何とかならないのか」と何度か批判されている。

奇妙なのは、長島さんは本書の「第 1 章 トウオ」を高く評価してくれていることだ。自己評価としては、ここは資料集に過ぎず、バックグラウンドの説明でしかないつもりだった。と

ころが、「君の論文で最も感心したのはアドラの病気認識に踏み込んだことである。これは災因論とは離れて実にレベルの高い民族誌と尊敬する。」（電子メールによる私信）との評価である。「尊敬する」というのは長島さんの語彙のなかでは最上級の誉め言葉である（私が頂戴したのはこのときだけである）。ちなみに別な方は、「「88」も、ずっと読んでいけばいいことがあるのではないかと思って頑張って読んだけど（何もなかった）」。今のところ、私には後者の評価のほうが普通の評価だと思える。

### 3. 英語版と日本語版、他分野との関係

想定する読者がアドラ人、あるいはウガンダ人であれば、日本語での出版は、実はあまり意味がない。本当は彼らにとって readable な、英語版とアドラ語版を用意しなければならない。この作業は、今後の私の義務だろうと考えている。日本語版が先になったのは、単にもろもろの世情によるものである。後から考えると、そういった認識の背景には、書いた報告にそのままアクションが返ってくる程度の高い（相対的にだが）日本での調査や民俗学的な研究の経験が参考になっているかもしれない。日本について、海外の人類学者が書いたもののなかには、ときにオリエンタリズムまるだしの、ひどいものがある。それらを他山の石として、冒頭に述べたような立場をとることになったという解釈もなりたたなくはない。民族誌は書かれている言語を問わず、現地で通用しないデータでは駄目である。

「学問領域を超えて評価される」と橋本さんは書いてくれた。私は、閉鎖的に働きがちな「学問領域」という概念に、あまりいい印象をもっていない。ディシプリンは、便宜的なものであり、どこからよりストレートに引用するか、「蜘蛛の巣」のどの網の目に引っ掛けてものを語るのか、というほどの意味であり、厳しい垣根を設けることにさほどの意味を見出すことができない。私自身、人類学が専門とはっきり言うようになったのは今の職場に来てからのことである。前の職場（東北学院大学教養学部）では、教養科目の「文化人類学」の講義は担当していたが、環境社会学者や農村社会学者、福祉社会学者と一緒に授業を担当していて、学生からは社会学＝民俗学＝宗教学プロパーだと思われていたし、それを自任していた。そのことで視野が広がった部分もある。とくに人類学は人文学とも社会科学ともいわれる「foxy（狐のようにずるがしこい）」学問である。今でも、エスノメソドロジーの創始者ハロルド・ガーフィンケルと解釈人類学の提唱者クリオフォード・ギアツがともにタルコット・パーソンズのもとで学位を得た、という事実は興味深いものだと考えている。自戒を込めて言うのだが、「～学では」の後に続く叙述は、よくて保身、悪くすると、不勉強の吐露となっている場合が多い。とはいえ、人生は有限なので、その有限性ゆえのやむをえない戦略として優先順位をつけなければならないアイロニーは、ひしひしと感じる。

本書の基礎となった録音資料を起こす作業の背後には、一部ではあるが、エスノメソドロジーの会話分析についての関心と認識が影響している。私が大学院生として慶應義塾にいた90年代はじめ、私はエスノメソドロジーを真剣に研究しようと考えていたことがある。岡原正幸さ

ん (当時助教授) と棚橋訓さん (当時専任講師) や浦野茂さん (当時大学院生) と研究会を行い、私が発表した当時の成果の一部が、本書にもおさめられている。橋本さんが、「人類学を超えて別の学問領域」と書いてくれたときに真っ先に頭に浮かんだのは、方法だけだとしてもエスノメソドロジーの方法だった。相互作用を真剣に考えながら、そこに流通する概念の意味を考える、という関心は、当時から引き継がれたものであったかもしれない。ただし、私はこの間、エスノメソドロジーの現状については全くフォローできていない。この能力不足、努力不足はまことに残念なことである。

#### 4. 現地での展開と今後の研究について

2018 年夏、私はオボス=オフンビ邸にいた。本書を遺族に手渡すためである。また、数名の学生が参加する海外研修の一環でもあった。屋敷の中を案内してもらいながら、ウガンダ近現代史の一コマに思いをはせる、そういう実習の企画であった。ゴドフリーと、オボス=オフンビの妻エリザベスが、私や引率した学生と一緒に記念撮影に収まった。翌週、遺族の一人 (ACK の娘) が私を呼び出し、以下のように聞いた。「故人が地域に対して危害を加えたと地域の人が信じているのは事実らしい。ご存じなら被害者とされている人を教えてください。和解儀礼をしたいのです」。非常に判断は難しいところだったが、私は伝聞としてある名前を挙げた (故人)。情報提供者、当事者となるコミュニティ (この場合はクランの会議) が、遺族への公開を承認 (もっと言うと要望) していたからである。希望的観測では、おそらくは遠からず、和解儀礼が開かれることだろう。もしこじれたら介入しなければならないかもしれない。このように現在の民族誌は不可避免的にアクチュアルなところがある。私の場合も、本書に書いたように ACK の遺族に訴えられそうになったこともある。そのとき一緒に頭を下げに一緒に白い鶏 (和解の象徴) を下げて同行してくれた Tanga Odoi 博士は、現在では、ウガンダ共和国の与党 NRM の大幹部である (もう会うことも難しい超 VIP である)。隔世の感がある。本書と、本書のもとになる博士論文は、もっともっと早くに書かれるはずだった。いいわけにすぎないが、書いてほしくない、と明確に言う人がいる内容を書こうとするのはなかなか強い気持ちがあるものだ。書くためには当事者の理解と「公益」とを考えなければならない。訴えられるかもしれない、という状況で粘り強く理解を求めていった結果が、この時期になった。これも書き終わったから言えることである。

外形的には、私にとって本書は、人生中期の、あるいは研究生生活のなかでは初めてのまとまった仕事、ということになるのであろう。私は、人類学的慣習にしたがって、通過儀礼として、きちんと民族誌を書いて、まず民族誌家になりたかった。コンヴェンショナルな意味において、私は本書刊行によって初めて人類学者になったことになる。

しかし、いうまでもなく私はすでに別の仕事を始めている。本書のなかの議論のほとんどは、私の眼には、今は役割を終えたもののように色褪せて映ってしまっている (そんなはずはないので、これは一時的な現象だろう)。上記の通過儀礼的理由もあつてか、民族誌にもとづかない

論文を書くことには、これまで多少の抵抗があった。本書の草稿を書き上げてから、私は初めて現地調査にもとづかない論文を書き（梅屋 2017）、学会誌にこれまでは主たる関心としていなかったシティズンシップの特集を組んだり（梅屋・波佐間 2018）、英文の論集を編んだりした（Hazama, Umeya, and Nyamnjoh 2019）。いくらか研究のスタイルも変質してきたような気がする。（もちろん手を抜いているわけではないが）いわば「本業」ではないシティズンシップ研究のほうが、意外なことに反響がいいのはちょっと複雑な気持ちである。先に述べた義務のほか、今後どのような研究に私の関心が展開していくのかは、私自身よくわからないでいる。

### おわりに

残念なことに「本業」であるはずの本書刊行後の反響はいまだ限定的である。多くは、「受け取った」とのみ反応し、あるいは書店の書棚で「見た」とのコメントにとどまるが多かった。出版から1年以上が過ぎてなお、わずかな例外を除き「読んだ」という声はほとんど聞かない。学術誌でも書評の引き受け手がなかなかないようだ。『宗教と社会』誌では滝澤克彦さんが書評を引き受けてくれた（滝澤 2019）。『フォーラム現代社会学』と『アフリカ研究』では、松田素二さんの手を煩わせているらしい。本誌で書評をしてくれた橋本さんは、本書の対象となったアドラと同じ西ナイル系に分類されるヌエル（主に南スーダン）を長年研究している。橋本さんのお仕事も、同じ年の日本学術振興会研究成果公開促進費を得て、本書とほぼ同時期に出版された（橋本 2017）。テーマも極めて近いので、併せて注目いただけると幸いである。橋本さんは、地域的な土地勘もある程度共有しているはずだから、若干こわくもあったが、ありがたかった。優秀な研究者が、別の書くこと、読むことに充てられたはずの時間をあえて割いて、この書評に充ててくださった。改めてその労力に感謝したい。本誌の読者にも、ぜひ一度読んでいただいて、感想を著者にぶつけていただきたいと切に願っている。

### 追記

昨年亡くなった吉田禎吾慶應義塾大学元客員教授（東京大学名誉教授）や阿部年晴埼玉大学名誉教授、急逝した渡辺公三立命館大学名誉教授、そして浜本満九州大学名誉教授（一橋大学名誉教授）、そしてこの方々を非常勤講師として招聘した宮家準慶應義塾大学名誉教授、鈴木正崇慶應義塾大学名誉教授と、当時の慶應義塾大学文学部および社会学研究科の方々に感謝申し上げる。本書には献辞はないが、本書は、これらの方々にささげられるべきものでもあった。

### 【文献】

橋本栄莉.2018.『エ・クウォス—南スーダン・ヌエル社会における予言と受難の民族誌』九州大学出版会.  
Hazama, I, Umeya, K. and F. B. Nyamnjoh. 2019. *Citizenship in Motion: South African and Japanese Scholars in*

*Conversation. Bamenda: Langaa RPCIG.*

- 長島信弘.2018.「反理論のすすめ—人類社会のより深い理解を求めて」神戸人類学研究会.神戸大学国際文化学研究推進センター共催.神戸大学.2018年6月30日.
- 滝澤克彦.2019.「書評 梅屋潔著『福音を説くウィッチーウガンダ・パドラにおける『災因論』の民族誌』」.『宗教と社会』25号.頁数調整中.
- 梅屋潔.2012.「遠くから私が気仙沼にこだわるいくつかの理由—『ドキュメント』のひとつとして」.『震災学』第1号.249-278頁.
- .2017.『『見えない世界』と交渉する作法—アフリカのウィッチクラフトと、フランシス・B・ニャムンジョの思想』.『思想』1120号.86-98頁.
- 梅屋潔・波佐間逸博.2018.「序—東アフリカにおけるシティズンシップ研究に向けて」.『文化人類学(旧民族学研究)』第83巻2号.166-179頁.
- Umeya, K. and Michael Oloka-Obbo.2017. “Witchcraft and Curse in Padhola.” (「パドラにおけるウィッチクラフトと呪詛—決して保護されることのない伝統的無形文化」).現代民俗学会第38回研究会.東アフリカ・ウガンダのフォークロアと文化遺産—文化遺産として承認されるフォークロア/承認されないフォークロア.現代民俗学会主催.神戸人類学研究会・神戸大学国際文化学研究推進センター共催.神戸大学.2017年9月2日.

(うめや きよし 神戸大学/ケープタウン大学)